

『弱っている者に心を配る』

岩河敏宏

聖書：詩編 41 編 1 節～3 節【新改訳】

1 幸さいわいなことよ。弱よわっている者ものに心こころを配くばる人ひとは。

主しゅはわざわいの日ひにその人ひとを助たすけ出だされる。

2 主しゅは彼かれを見み守まもり、彼かれを生いきながらえさせ、

地ち上じょうでしああわせな者ものとされる。

どうか彼かれを敵てきの意いのままにさせないでください。

3 主しゅは病やまいの床とこで彼かれをささえられる。

病やむとききにどうか彼かれを

全まったくいやしてくださるように。(下線部；著者)

私たちが生活する中で、日常が日常ではなくなる場面があります。その一例として、病になることが挙げられます。この数年、私たちがそれを実感することとして、新型コロナウイルスがあります。当初はこれに罹ると、二週間程度は隔離されたうえに、罹患者が接触した場所や物などを消毒除菌することが行政から要請されました。また、連日ニュースで取り上げられたこともあって、罹患者は肩身の狭い想いをする事になったことは、記憶に新しいことです。旧約聖書の時代も、病気は罪のゆえだと考えられていました。病は、たたり、呪い、邪悪なものを取り付いた結果だと考えられていたからです。

病は、その人自身にとっても、またその周辺の人にとっても様々な変化をもたらします。病が深刻な場合は、健康や職場を失うだけでなく、生きる気力を失い、虚無感に襲われます。また、自分に関わる人々からの言動によって、心が傷つき不安や孤独感に襲われることもあります。しかし、これらの体験から、人生における本当の幸福は何か、という問いかけから、人生の方向転換と再起を期待することが可能になることもあります。冒頭の聖句も、そんな詩の一つです。

詩編には「幸いなことよ」で始まる詩が多くあり(1編1節, 33編12節, 40編5節他)、大半は「主を信頼し自分の神とする者の幸い」という視点です。対して41編は、「弱っている者に心を配る人」(新改訳)、が“幸いだ”と言います。私たちは、ついアドバイスや勧めを口にしてしまい、これの実践には困難を覚えます。紹介した最後は、「全くいやしてくださる」(3節)です。原意は「ひっくり返す」で、主は、私たちの状況を一変させることができると言うのです。詩編41編直訳は「病の時に、床をひっくり返す」です。私たちの神こそ、最も「弱っている者に心を配る」ことのでき方で、この神と共感できた時に心を配ることができるので、幸いだというのです。